
つれないお姫様

桜羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つれないお姫様

【Nコード】

N6500H

【作者名】

桜羽

【あらすじ】

性格がツンツンしている雛姫^{ひなぎ}。美人でモテるが、男嫌い。それにはある過去が……。一方、男子に興味を持たない雛姫に興味を持った、校内で一番軽いと思われる奏太^{かなた}がある日、雛姫に接近して……。

プロローグ

最初はあなたのことなんか

信じられるわけない

信じてやるもんか

って思ってた。

だって

嫌いだったから。

だけど

今になって思うよ。

私を変えてくれたのは、あなた。

あなたが私を変えた。

今なら心から言える。

大好き。

第1話・危険人物

男なんて信じない。
信じれない。

男なんて大嫌いだ。

「ひなあー」

「ん？」

私はお昼ご飯のパンをくわえながら、後ろを向いた。

はやかわ ひなき
早川雛姫。 17歳。

「今日遊びに行かないッ？」

いきなりの親友、水瀬凜みなせりんからの誘い。

「うーん…場所による」

カラオケとかなら行ってもいいかなー。

そんなこと考えながら私は残りのパンを口の中に放り込んだ。

「カラオケ」

おっ。

ナイスだな。

「行く行く」

「わーい じゃあまた放課後ね」

凜は私に手をふって自分の席へと戻った。

カラオケ…。

久しぶりだなー。

「飲み物どうする？」

凜とふたりっぺのは、すぐく久しぶり。

「イチゴミルク……」

「ぷっ 可愛いわぁ」

凜は私の頭をポンと叩いた。

「……うっさい」

いいじゃん。別に。

甘いのが好きなんだもん。

「……雛姫ってあんまり人に心開かないじゃん？」

「…まあね」

「だからね、嬉しいんだ。雛姫のこといろいろ知ってて」

そう言って、凜はニコツと笑った。

凜は素直だ。

すごく可愛くて……。

私とは正反対の性格だな。

私は周りからよく、“ツンツンしてる”的な事を言われる。

高校入るまではこんな性格じゃなかったと思う。

私が変わったのは中学3年くらいだから。

「き…雛姫？」

「え?! あ、ごめん!! 聞いてなかった…」

つついボーっと…。

「もー！！次、雛姫の番だよー」

凜は私にマイクを渡してきた。

「ありがとうー。ごめん」

そう言つてマイクを手に取り、ストレスを吐き出すかのようにして声を出した。

歌が、サビに入ったところだった。

ガチャ

誰かが部屋のドアを開けた。

私は歌うのをやめて、ドアの方を見た。

「やっぱり 凜じゃん」

そう言ったのは、一人の男。

その男の後ろには数人の男…。

ていうか何勝手に入ってきてんのよ。

「えっ、秋？！」
しゅう

うわっ。凜が食いついてる！！

それもそのはず…。
だって凜はこの男、川合秋
かわあい しゅう
に恋をしているから。

「俺らもいいー？」

……っは…?!?!?

なに言い出してんのコイツー!!

自分たちの部屋借りたんでしょ…?!?!?

「え…でも…」

凜はちらりと私を見た。

凜は私が男嫌いなのを知っている。

だから迷っているのだろう。

…嫌だ…。

嫌……だけど……。

凜に捨てられた犬みたいな顔されたら断れない。

私は凜にニコツと笑ってみせた。

オツケーの合図だ。

嫌だけど。

心底嫌だけど。

凜のため。

「だめー…?」

秋は凜にシヨボンとした顔をした。

「大丈夫、いいよ」

普通の女の子ならこっついう顔を“可愛い”って思っただろうな。

私は鳥肌が立つよ。

「やった んじゃー奏太かなただけこっちの部屋ね お前らは彼女もちだから、別室」

秋がそういうと、数人の男子は奥の部屋へと入っていった。

そして、ふたりの男が入ってきた。

「早川と来てたんだ？」 私は自分の名前が会話に入っただけで、体が跳ねた。

「うん。そだよ」

凜は秋に笑顔を向けた。
恋してるって感じた。

「秋は、奏太と来たんだね」

凜が奏太と呼ぶ男。

やなぎだ かなた
柳田奏太。

噂によれば、校内で一番軽いらしい。

「うん。よくくるよ」

「へえ」

凜がそう言ったところで会話がなくなった。

だ、誰か口開きなよっ!!

そう思った瞬間だった。

「早川サン」

甲高い声で私を呼んだのは、柳田奏太。

「…なんでスカ？」

私はいかにも“話かけるな”という口調で柳田奏太に言った。

「わ。あからさまに嫌な顔してる」

な…なにコイツっ!!

わかったんなら話かけるのやめろっての!!

「…まあね」

私はさらに嫌だというような声を出した。

ふっ。

返す言葉もないだろ!!

私は勝ち誇った気分だった。

普通の男子ならここらへんで、私に話かけるのをやめる。

コイツもきつと……

「彼氏いんのー？」

う……

まだくるか。

しつこい男だな……。

「いない」

私は即答した。

彼氏いたことはあつたけど……。
思い出したくもない……。

「へえー。好きな人は？」

さっきからニコニコして私に質問してくるコイツに私はイライラした。

「……男、嫌いだから」

嫌い。

大嫌い。

話もしたくない。

「…ふうん。男嫌い…ねえ」

そう言っつて柳田奏太は席を立っつて私の方に向かっつてきた。

凜たちは黙っつて私たちのやりとりをみている。

柳田奏太は私の目の前に立っつた。

「…どいてよ」

「嫌だっつて言っつたら?」

ニコニコしたまま柳田奏太は私に言っつた。

「私さ、半径1メートル以内に男に近寄られたくないんだよね」

今の私とコイツの距離は30センチほどだ。

近寄るな。

近寄るな。

近寄るな…!!

「っ…あっち行ってよ!!」

私はついに大声を出した。

手が震えていた。

「…わがままだね」

わがまま…!!?

コイツここまで言われてなんでもこうとしないの…!!?

神経どうかしてる。

「どけっつってんの!!」

私はキッと、柳田奏太を睨みつけた。

たぶん今まで生きてた中で、初めてここまで人を睨みつけた。

「命令ばっか。わがままだなあ…。どっかのお姫様みたいだ」

コイツっ…!!

私は本気で苛立った。

「うつさい!!早くどいてよっ…!!」

私が柳田奏太を押そうと手を出したした時だった。

パシッ

「ザンネン」

私の手は、柳田奏太に掴まれた。

…ドクン

やだ。

…ドクン、ドクン

やだ。やだ。やだ…!!

「…触らないでよっ!—!」

私は声を張り上げて、手の自由を求めた。

「しめーんね?」

そう言うと、やっと手を放した。

ニコニコしているコイツが腹立たしい。

私にかまわないでよ。

触らないで。

「早川サンで…名前、ヒナキだよね?確か…離って漢字に…姫?だよね」

なんで知ってんのよ。

「…そうよ。なに?」

「今日から早川サンのこと、姫って呼ぶね」

な…に…?!

姫って…。

「あんだなんなの…!?!」

私は強い口調で柳田奏太に向かって言った。

「よろしくね 俺の事は奏太でいいよ」

人の話を聞いてない…!!

私は柳田奏太が差し出した手を、振り払った。

「二度と近寄らないで…!!」

そう言うと、私は部屋を出た。

「ちよっ…ひなっ!?!」

凜の驚いたような声が聞こえた。

だけど、今の私には気にする余地もなく、そのままカラオケ店を出た。

まだ残ってる。

握られた手の感触。

「……っ、」

急に吐き気がこみ上げた。

…やだ、やだ。

触らないで。

なにが“姫”よ。

気持ち悪い。

やだ。やだ。やだ…！！

とにかく…。

あの人は確か同じクラスだ。

関わっちゃいけない。

絶対に、絶対に…！！

あんなやつとは関わらない。

私は心に誓った。

私と、奏太の出会い是最悪だったね。

第1話・危険人物（後書き）

たぶん

奏太のキャラが

あとあと

変わる気がします…（汗

不安です（・|・）

第2話・ゲーム

学校に行きたくない。

行ったら、ヤツに会ってしまっ…。

関わりたくない。

絶対にヤツに関わっちゃいけない気がする。

昨日…カラオケに行っ…てなかったら…。

今、こんな暗い気持ちじゃなかったら…。

「……よし、」

でも過去のことをウダウダ言っても仕方がない。

私は、あんなヤツには近づかない…！

そう、心に決め、私は学校に向かった。

学校に着くと、いつも通りの風景にホッとした。

「ひ、ひなき…ごめんね…？」

教室に入るなり、凜が私に謝ってきた。

あ…。昨日のことか。

気にしなくていいのに……。

「大丈夫。私こそ勝手に帰ってごめんね」

そうだ。私の方が謝らなければいけない立場だ。

「あ、うん！！私は大丈夫だったよ」

凜は、私に笑顔を向けた。
その笑顔にホッとする。

「そっか。良かった」

私は笑顔を向けてそう言っていると、自分の席へついた。

「……………?!?!?!」

私の席には人が座っていた。

しかも……………。

「あ。姫 おはあよ」

私を“姫”と呼ぶヤツ。
ひとりしかいない……。

「どうして」

私はあえてにっこりしながら言った。

「えー じゃあおしよ」

.....。

やばい。

うざいって言葉じゃ足りないな。

「どけなさい」

私はイスを軽く蹴った。

すると、

「しょうがないなあ」

よっころしよ、と言つと柳田奏太は立った。

「...おはあよ」

.....は？

「おはよ 姫」

な...なに...？

あいさつを私にしつこくしてくる。

…あのニコニコ笑顔で。

「…なに？」

私が尋ねてみると、

「ミッションだよ。まずは挨拶からでしょー？」

み……ミッション？

「はい？私別にあなたと仲良くする気ないから軽くつつかかってやった。これが本心。」

すると、柳田奏太は一瞬顔を歪ませた。

「…あなた、じゃない」

「……は？」

「奏太だから」

そんなことかよー！

「…知らないわよ！！そんなのっ。お願いだから私に近寄らないでっ…！！」

これ以上私に近寄らないで。

これ以上私にちよっかい出さないで。

これ以上私に

関わらないで。

「あっそー 俺は、ひかないからね？いくら姫が俺のこと嫌ってても」

…なんのこと？

意味わかんない。

「どっいっことっ」

私は気になり、問いかけた。

「秘密だよ」

そう言うと、柳田奏太は自分の席に戻って、突っ伏して寝始めた。

なに…？

すごく気になるんだけど。

だけど

関わらないって決めた。
ていうか関わりたくないから。

別にあんなのどうでもいいや。

………柳田奏太って
しゃべり方が変だ。

今更だけど。

…あれがマジの性格？
私には信じれない。

あんなしゃべり方する人いないよね。

なんか…馴れ馴れしいってのはまた違う。

まさに“軽い”にぴったりのしゃべり方って感じた。

友達みんなは、かつこいいとか言ってるけど、私には理解できないな。

「……………」

私は柳田奏太を凝視した。

茶色の髪の毛。

サラサラのストレート。整った顔立ち。

長いまつげ。

少し細い目。

大きい手。

よく考えてみれば、周りからみればイケメンなんだろうな。

私は思わないけど。
死んでも思わないけど。

すると、突っ伏しながらこっちがわを見ていた柳田奏太は目を開けた。

わっ!!!

目が合ってしまった!!

「姫こっち見てたね」

ニカツと笑った柳田奏太。

だけど私はそれを無視した。

普通、こういうところで普通の女の子はドキドキとかするんだろうな。

私はしない。

絶対にしない。

男なんて信じない。

私が信じるのは家族と友達だけ。

それだけで十分だ。

「…雛姫って、奏太の事好きだったりする？」

そんな質問を投げられたのは、昼休み。

もちろん、質問者は凜。

「…なんで?!」

好き？

いやいや。

大嫌いですよ？

「仲いいじゃん」

「嫌いだもん」

私はやはり、即答した。

そんな私を見て、凜はしゅんとした。

う……。

そんな凜に心をうたれた私。

だけど、嫌いなものは嫌いだ。

「奏太のイメージってさ、雛姫から見とどう？」

「軽い。しつこい。女好き」

またもや即答してしまった。

「あはは。やっぱりなあ」

……え？

凜は笑って私を見た。

「実は、奏太ああ見えて付き合ってた人まだ2人なんだよ」

「…ふうん」

そうなんだ。

意外。すごく意外。

「ただね…奏太もいろいろあったらしくてさ。あんな性格作って…

…

「……作ってるの？」

性格を作ってるの？

「うん。私中学同じだったからねー。全然性格違つよ」

「そうなんだ」

……ま。

私には関係ないんだけどね。

私は手に持っていたイチゴミルクを一気に飲み干した。

あいつ、なにかツライ過去でもあったのだろうか。

はっ。

なに気にしてんだろっ。

関係ないヤツなのに。

知らない。

男となんか

関わってもいいことなんかない

……

「雛姫はさあ…やっぱ恋できない？」

メロンパンをちまちま食べながら私に笑顔を向けてきた凜。

恋……どころじゃない。

「うん。私一生独身でいるから」

絶対に、私の未来は独身に違いない。

「ぶっ……そんな先のことまで…」

凜は顔をくしゃっとして笑った。

私には友達がいればいいよ。

家族がいればいいよ。

「…凜がいればいいや」

「……へ？」

そうだ。

私は別に恋したいわけでもない。

「凜が一番大事」

そう言って私は凜に笑顔を向けた。

「…ひ…ひなあゝ…!!」

すると、凜は私に涙目で抱きついてきた。

な、泣くほど!?

「姫 迎えにきたよ」

……ン？

なんか今嫌な声が……。

私はゆっくりと振り向いた。

「……………」

柳田奏太…。

まだしつこいのか。

へこたれてしまえばいいのに。

私は柳田奏太を無視し、凜に視線を戻した。

「無視ですかあ？」

コイツのしゃべり方イライラする。

語尾をのばすのが異様に多い。

「近づかないで」

私のいきなりの言葉にも動揺しないコイツ。

だけどそれでも私は続ける。

「言ったでしょ?! 昨日。二度と近寄らないでって」

そう言っつて私は柳田奏太を睨んだ。

「そだっけ?」

ニコニコ笑顔のまま首を傾げた。

……腹が立つ。

なんか…話す気力なくなってきた。

「姫―俺と付き合わない?」

「……は……い……?」

相変わらずバカだ。
なんで嫌われているということを知っていて
“付き合って”
になるんだ？

「男嫌いを、なおしてあげる」

ニコニコ笑顔で私の長い髪の毛に触れた。

「…離して!!」

無理。無理。無理。

助けて。助けて。

「……んじゃ決定」

そう言って私を一瞬ちらりと見た。
その顔は笑顔ではなかった。

そう、まるで……欲しいものを手に入れたような満足感あふれた顔
…。

なにが……目的？

「嫌よ。あんたとなんか付き合わない」

私は必死に訴える。

だけどそれはコイツにはきつと届かない。

「ンー…」

私が本気で言ったからだろうか。
珍しく、悩み始めた。

「じゃーあ、こうしよう」

そう言って私に笑顔を向けた。

……どっすんのよ。

「俺が1ヶ月以内に姫のことを落とす」

柳田奏太は私に向かって意味のわからないことを言い出した。

「落とせたら…正式に付き合ってね」

そんなゲームみたいなこと、他でやれ。

「…はっ…。バカじゃない？私は絶対にあんたなんか好きにならな
い」

あんたなんか

好きになんてならない。

「落とせなかつたら…俺は二度と姫とは関わらない」

そんなに…自信があるの？
でも…二度と関わらない…。
それって嬉しい。

「……………オッケー」

私は絶対にコイツなんか好きにならない。

絶対に男なんかとは関わらない。

男なんかもう、好きになれない。

「交渉成立　じゃー今日から1ヶ月。ルール1。姫は俺には逆らわないこと」

「……はっ?!」

なにそれ…!!

「大丈夫。半径イチメートル以内には入らないよ」

な…なんで覚えてるんだ。

それから、このゲームの説明が始まった。

1・私はいつに逆らわない。

2・途中棄権ナシ

3・私の半径イチメートル以内には入らない。

これだけのルール。

一番がすごく嫌だけど、関わらないようになるんなら、仕方ない。

しかも半径イチメートル以内には入ってこないし。

私はキツと柳田奏太を睨みつけた。

痛い目みなよ。

みんながかっこいいとかいうから

誰でも落とせると思ってんでしょ？

だけどね

私は絶対にあんたになんか落ちない。

このゲームに勝つのは

絶対に私。

第2話・ゲーム（後書き）

奏太って、

つかみにくいですね。笑

第3話・ごはん

「ひーめー!!」
「飯!!」

「……パシリ？」

ゲーム(?) 開始初日。
私はなぜかパシリぽい。

まあそれですむならいいんだけど……。

「ちがあう。俺なりの愛情表現なの」

意味がわからん。
愛情表現って……。

むしろ迷惑だし。

「購買のパンでいいの？」

今から行ったら混んでて、たいしたものないだろうなあ……。

「……いらナイヤ」

一瞬なにかを考えたのか、間が空いてから答えをだした柳田奏太。

「気まぐれすぎなんだよ!!」

意味わかないしっ。

「奏太、ご飯ないの？」

柳田奏太の周りに女子が多数集まっていた。

「ん。いらねーの」

にこりと笑顔を振りまいている。

「うちのあげよっか？」

女子の一人がパンをひとつ、柳田奏太の前に突き出した。

「ありがとうー」

…いらんないんじゃないんですかっ…!?

気分屋すぎだ。呆れる。

柳田奏太はパンを受け取って、食べたした。

「なんで、買いに行かなかったの?」

「……危ないじゃん」

柳田奏太はぼそつと呟いた。

「えー?あつ、この時間すごい混むもんね」

「そ」

なんだそりゃ…。

私のこと、心配だったから?
だから行かせなかったの?

……なにコイツ。

「や……柳田……奏太……！」

私はパンを頬張っている柳田奏太に声をかけた。

「はあい なんでしょう」

すると、すぐにこちらを向いた。

こんな……。

男前な顔してるのに、なんでこんなしゃべり方なんだろ。

私は心の端っこだと思った。

ってー!!

違う違うー!!

そんなことではなくて……。

「……ありがとう」

って。

なんで私がお礼言ってるんだろ。

自分でもよくわからない。

「別にいい。姫に怪我されちゃ困るからね」

「……」

なに、この男。

なんでこんなにストレートなんだらう。

なんで……。

こんなにも

うらやましいんだろ。

「……姫ってお弁当自分で作ってるの？」

柳田奏太がパンを食べながら私に問いかけてきた。

「……ごん、そご」

「もしや……」。

「もしかすると……」。

「この展開は……！！」

「俺の分もっ」

「……………」。

「予想が」

「当たってしまった。」

「嫌よ」

「なんでこんなやつにお弁当なんて作らなきゃいけないの!？」

「ルール1 覚えてるかなあ？」

「……………」

ここで断ったら

私の負けに近づいてしまふ。

そんなのは嫌だ。

コイツをなんとか私のそばからどけたい。

それには

指示に従うしかない…。

こづなったら…。

なんでも言うこと聞いてやるわよ……！……！

その日、私の中で何かが切れました。

「……作ればいいんでしょ!?!?」

「やたあ」

柳田奏太はニコリと私に笑顔を向けた。

ふふふ…。

思い切り焦げたやつとか入れてやるんだから!!

みてなさいよ。

私にお弁当を作らせたことを後悔させてあげる。

第3話・ごはん（後書き）

雛姫の

企みが始まりました笑

第4話・笑顔のウソ

私は朝5時に起床した。

そう。

“へた”なお弁当を作るため。

きつとアイツは

「姫これまずい」

とか言ってくるはず。

これで次の日からはお弁当を作らなくてよくなるはず……！！！！

これで手間が減るわ。

そうして、私は

あえて焦がした卵焼きと

油をきっていない唐揚げと

タコの足がぐちゃぐちゃで焦げているウインナーを

お弁当箱に雑にいれた。

お米の上には

梅干しならぬ、マヨネーズをかけて。

…そして、試しに食べてみた。

卵焼きとウインナーは焦げがとてつもなく苦い。
唐揚げは油っこい。

「…すごいな、私」

こんなお弁当見たことない。

初心者でもこんなにひどくはならないと思う。

私はへたくそなお弁当を横目に、自分のお弁当を作った。

「姫、お弁当はっ？」

案の定、ニコニコ笑顔で私に問いかけてきた柳田奏太。

「作ったよ」

私はポン、と柳田奏太の前にお弁当を置いた。

「うわぁーい」

私の作戦も知らずに喜んでいる。

柳田奏太はお弁当の箱を開けた。

「……………」

しばらくの沈黙があった。

……………キレたりする？

「いただきます」

「?!」

なんで食べるのよ!!

お腹壊すんじゃないの？

柳田奏太は卵焼きを口の中にいれた。

もぐもぐと、口を動かしている。

そして、眉間にシワを寄せていた。

私はその光景にふきそうになった。

「……どうっ？」

けれどそれを我慢し、わざと問いかけた。

きつとまらずいって言っ。

そして私は明日から作らなくてよくなる。

「ん？おいしいよ」

……は……いつ?!

「…な…なんでっ!?!」

まずいならまずいって言いなさいよっ。

「なんでって言われてもー……。おいしいよ」

じゃあ

じゃあなんで眉間にシワ寄ってんのよ。

苦笑いじゃないの。

なんでそんなムチャするの?

……なんで?

「しじやそしじし」

「さじ、しじ……」

柳田奏太は全部食べていた。

焦げた卵焼きも

油っこい唐揚げも

変なウインナーも

マヨネーズご飯も

全部残さず食べていた。

「……………」

「明日も作ってね」

「…え…」

なんで？なんでよ。

あんた頭おかしいんじゃないの？

心の中ではまずいって思ってるよね。

なのに

こんなまずいもの明日も食べたいの……？

「……………」

「姫？」

「……」
「……めん……ありがとう」

わざとまずくしたのに。
食べてくれたのが

明日も作ってって言うてくれたのが

少しだけ

少しだけ嬉しかった。

「うん？」

明日は……ちゃんと作ってあげようかな。

「まずかった？」

私は思わず聞いた。

「おいしかったよ」

「うそだ。まずかった」

「おいしかったって」

「なんでよ?!」

「姫が作ったから」

「わざとまずくしたんだってばっ……!!」

はっ……!!……!!

つい勢いあまって言ってしまった……!!……!!

「……やっぱりねえ。姫ならやると思った」

ニコニコしながら私に接してくる。

怒ればいいじゃん。

「……………」

「…なに黙ってんの？怒ってないよ？」

ニコニコしながら私に言う。

なんでいつも

ニコニコしてられんの？

まずいお弁当わざと作ったんだよ？

「…ばかじゃないの？柳田奏太…」

きつとどこかのネジが外れてしまったのだろう。
可哀想に。

「奏太って呼んでよ。フルネームやだ！」

「……………」

……………だって。

なんか：親しいみたいで嫌だ。

男嫌いなんだってば。

「…ルール1、姫は」

う。

「わーったわーった！！呼びますよ…」

呼べばいいんでしょ！？

「いい子」

なに。こいつ。

軽い雰囲気丸出しじゃない。

「奏太ってまだ2人しか付き合ったことないんだよ」

ふと、凜の言葉が私の頭に浮かんだ。

……この軽い男が？
2人？

あの時は軽く流したけど、今思えばあんまり信用できた話ではない。

「あつ。 姫!!」

いきなり何かを思い出したかのように、奏太は私を呼んだ。

「……なんでスか」

「ゆーえんちっ」

………は？

なにこいつ。

ついに頭が本気でイかれたか？

「明日いきたいっ」

明日って…！
そんな急に？！

しかもこいつと？！

大事な休日の意味のわからないこいつと過ごせと？！

「じょー…だんっじゃない…！」

「…ルール1、姫は」

「…うっ…さいわっ…！」

ついに私はキレた。

人間に向かって、初めてキレた。

「ルール1っ」

それでもまったく、きかない奏太。

しゃべる気失せるわ…。

私は奏太を睨みつけた。

「行こっ」

「……やだ」

「おごるから」

「行かないっ」

「アイス買ってあげるからあ」

「へっ…!?!」

あ……。

つられてしまった……。

「ぶっ。可愛い じゃ明日駅前に10時ねん」

「は!?! 行くなんて言ってな……」

「じゃあねっ」

私が否定する前に、教室をでていった。

サボリ?!

なんなの?!

ていつか!!!!

ぜってー行かねえっ!!!!

第4話・笑顔のウソ（後書き）

こらこら!!

女の子なのに

なんて口調・・・。汗

第5話・助けて（前書き）

長いです

第5話・助けて

行かない。

私は行かないわよ。

なんであんなやつのために休日を潰さなきゃいけないの。

もう、時間は10時。

きっと奏太は今頃駅前にいるはずだ。

そして、私が来るのを待ってるはずだ。

……待ってるのかな。

「……はっ！！いかんいかん！！」

行かない。

私には行かない。

2人きりなんて、怖すぎる。

男なんて、簡単に信じれない。

行けない。

）
）
）

いきなりのうるさい着信音に体がビクッと反応した。

この着信音は…電話だ。

ディスプレイには
“奏太”の文字。

「……………出るもんか」

私はボタンとケータイを閉じた。

男なんて信じないって決めたから…。

しかもあんな何考えてるかもわからないような男、余計に危ない。

……。

しばらくすると、電話が切れた。

私は安心感からふう、つとため息をもらした。

「……あれ」

ふと窓に目をやると、雨が小降りだった。

もう、いないよね。

流石に家に帰ったはず。

雨ふって良かった…。

私は安心して、リビングに向かった。

リビングにはお母さんだけがいた。

「雛姫、おはよ」

「はよ」

私は軽く挨拶をすると、ソファアに座った。

「ご飯食べる？パンでいい？」

「うん。食べる」

私はソファアからゆっくり立って、テーブルに行った。

パンにジャムをつけて、テレビを見ながら食べていた。

でも気にかけていたのは奏太のことだった。

「……………」
「ちそうさま」

「はあい」

私は急いで自分の部屋に向かった。

ケータイを即座に開いた。

不在着信：6件

新着メール：8件

「……まだ、いるの？」

私はメールを開いた。

【姫？遅刻？】

【遅刻だよ〜（ ）】

【……遅刻だといいな】

【姫、返信して】

【雨降ってきたあ〜…】

【事故じゃないよね？】

【電話出てよ】

【姫、寂しい】

……最後のメールは、今から10分弱前だ。

まだ、いるの？

「っ……ばかじゃないの?!」

私は家を飛び出した。

駅までは走ったって20分はかかる。

…流石にもういないかもしれない。

なんでこんなに心配してんだろ。

信じてないのに。

嫌いなのに。

「はあ……は……、」

「……姫っ?!」

まだ……いた……。

「あんたばかじゃないの!?!」

バカだろう。

こないなら帰ればいいじゃないか。

「……良かった。姫、事故にでもあったかと思った……」

「……え?」

事故にあったかと思ったの?

「……良かった……」

奏太は地面に座り込んだ。

初めて聞く弱々しい声が、その心配を本気だと思わせる。

「…びしょびしょじゃん」

雨はもう、本降りだった。

私だってもちろん傘をさしていない。

「大丈夫…。あーもう…良かった。良かった…」

手で覆われた顔からちらりと見えた眉毛が下がった、泣きそうな顔。

「…バカかて…」

なんで私ごときにそんな顔してんのよ。

なんで私がこないだけでそんな泣きそうな顔してんのよ。

「…いめん」

私はなんだか申し訳なくなつて、謝つた。

「……ふー……」

奏太はため息をつきながら私を見た。

「行こつー!!」

「は……?!」

この状態でまだ、そんなのんきなことを……。

「……無理でしょ」

こんな雨じゃ、遊園地なんてやっていないはず。

「遊園地じゃないよ」

「……じゃあどうよ」

遊園地行きたかつたんでしょ？

「ん〜……ケーキのバイキング」

「……………!!!」

ケーキっ…!!!

「姫簡単につれる」

「う、うっさい…って、私手ぶらなんだけど」

簡単につれて悪かったですね。
甘いもの大好きなんですよ。

「手ぶらあ?」

「家にお財布取りに行ってくるから待ってて」

私は家に向かった。

「おいっ…!!ちょ…別にいいから…!!」

奏太は私を止めた。

「俺がおごるから大丈夫」

ニコニコ笑顔で私に言った奏太。

なんかあんま頼りたくないけど……。

「……お言葉に甘えて」

私は奏太におごってもらうことにした。

まあ家まで距離あるし。いいかな…。

「そのコンビニで傘買ってくるから　ちょっと雨宿りして待って
て」

「ん」

私は大人しく座っていた。

………帰りたい。

ここで勝手に逃げちゃえばすむことだけど
なんだか私にはそれができなかった。

「姫」はいつ」

奏太が買ってきた傘は一つだった。それを私に渡した。

「あ、ありがとう……」

……奏太が濡れてしまう。
いいのかな……。使っちゃって。

「……ン？俺は大丈夫だよ？雨好きだからっ」

私の心を察したのか、奏太は言った。

「で……でも……」

悪いじゃんか。

私が傘をさすのにためらっていると、奏太は私に笑った。

「いってばー！！俺大丈夫だって。ね？」

「……うん、」

本当は、私だけが入るのは嫌なんだ。

だって風邪ひかれて、私のせいにされたりしたら困るし…。

「姫、優しいんだね」

「え！？ち…違うよ」

いつもと違う表情で笑った奏太。

……びっくりした。

なんか…調子が狂う。

「優しいよ。ほら、さしてさしてっ…！」

そう言うと、奏太は勝手に傘を開いた。

あなたの方が、全然優しいよ……。

「ど？おいしいっ？」

「おいしい」

ケーキバイキングって初めてきたけど…

こんなにいいものなんだ…！！
知らなかった…

「あはっ、姫今日素直だね」

「…だっておいしいものはおいしいもん」

特にこの甘いミルクフィードなんてたまらない

ケーキと言ったらショートケーキだけど私にとってのケーキと言っ
たらミルクフィードユシかない！！

「甘っ…」

奏太が呟いた。

………そういえば。

あんまり手が進んでないな。

もしかして……。

「甘い、嫌い？」

「……………あはっ
」

ああ、嫌いなんだ…。
また、無理してるんだ。

どこまで優しいんだ。コイツは…。

「……………無理しなくていいのに」

私はケーキを食べながら奏太に言った。

「えー？別に嫌いってわけじゃないけど…苦手」

苦手＝無理してる

んだっての！…！

「…どうしてそこまで私によくしてくれんの？」

いつもそうだ。

自分のことより私のことを考えてくれることが多い。

「姫が好きだからあ」

軽々しい口調で言った。
なんか…あきれるわ。

「……………あつそ」

好きっ…てなんだよ。

本気に聞こえないっての。

「冷たっ！！本気だよ？」

「はいはいありがとう」

「思い切り棒読みだし…！」

本気になんて考えられるわけないでしょ。

こんな軽々しいヤツ。

「…もう。信じてよ!」

信じて?

そんなの…。

無理に決まってるじゃん。

「…男なんて信じない」

信じない。

誰も。絶対に。

「俺も?」

「…あたりまえ」

信じたら負けなんだ。

「…なんで？」

ドクン……、

私の頭に一瞬にして昔の記憶が蘇ってきた。

あの日

あの腕が私をつかみ

私を傷つけ

私を ……

「…っ、っ………」

涙が無意識に出てくる。
吐き気がする。

助けて。助けて。

私の記憶を消して。

「…ちよ、姫っ?!」

奏太が

奏太……男……。

男……、

私を

キズツケ

ナグリ

コラシメタ

ワタシ……ガ……

悪いの……？

「じっ…じめんなさ…っ…じめんなさ…っ…！！」

ガタガタと体が震えた。

私はただ意味もなく涙を流していた。

「雛姫っ…！！」

私は奏太の声でハツとした。

「…あ…かな…た…」

奏太……。

奏太も…同じ…？

「じゅめん…ごめんな。聞かなきゃ良かったな…本当にごめん」

私の瞳に映ったのは、いつもの奏太じゃなかった。

いつものニコニコ笑顔じゃない。

泣きそうな顔で私に必死で謝っている。

奏太が私に手を伸ばした。

「じゅっ…じゅめんなさいっ！…！ごめんなさい…！…！」

その瞬間、私は勢いよく謝った。

「……姫？なんで謝るの…？」

わかんない。

私にもわかんない。

わかんないけど

怖い。

私に触れたあの手が。

「…姫、でよう?」

奏太はそう言うと、私の手を引っ張った。

「…や…っだ…!!触らないでよ…!!」

私は必死に抵抗した。
だけど奏太はそれを聞かなかった。

「…黙って」

「……っ、」

「…落ち着いた…？」

「……うん」

奏太が私をつれてやってきたのは、学校の屋上だった。

基本的に、鍵は貸してもらえないけど適当にペンどめでいじれば簡単に開くのだ。

「触って…ごめんな？」

切なそうな顔で私を見た、奏太。

「だい…じよぶ……」

大丈夫じゃない。

大丈夫なわけがないじゃない。

「…やっぱり話せない？」

私は考えた。

話してなにになるの？

「…あんたに話して…得なことなんてなにもない」

私を助けてでもくれるの？

記憶を消してでもくれるの？

そんなの無理でしょ

誰にも絶対言わなかった。

友達にも。

……凜にも。

それをなんでこいつに話さなきゃいけないの？

「……軽蔑するよ。絶対。だから言わない」

軽蔑なんてされたくない。

「…しないよ？」

「な…んで言い切れるの?!意味わかんない…!!」

コイツは私をいらだたせることしかできないの？

“ しない ”

なんて

言葉だけのくせに

「 しない。絶対 」

その目。

なに？

その私の心を見透かすような目は。

なんで

こういうときに笑顔じゃないのよ。

笑顔使うところ間違ってる

ふざけるな。

「ば……っかじゃないの?! そう言われたよ!! まえに友達に。 だけ
ど……」

だ け ど

「そっか…へー……」

その子は苦笑いしてたよ。

その話しをしてから私と目もあわせなくなった。

なんで？

“ 軽蔑しない ”

言ったじゃない。

してんじゃん。

してんじゃん。

……私が悪いの？

話してって言ったのは向いっつなのよ。

「……もう誰も」

「結局はみんな軽蔑する……！……軽蔑されるくらいなら私は誰にも言わない」

「……誰も」

「それに……思い出したくないっ……！……」

「心から信じれない」

私には

隠すことしかできない。

言ったら軽蔑される。

言いたくない。

思い出したくない。

思い出したくない。

「…みんながみんな…そうじゃあないよ？姫」

奏太は私を見て言う。

奏太は？

あんただってそうでしょ？

「……私の心の傷は…誰かに言っただって……消えないから……」

「んーじゃあわかった！ー姫。俺のこと信用できるようになったら話して」

……は？

なんでこんなときまで「イツはこんなこと言えるんだろっ」。

あきれる。

「…話さない!」

私は屋上を出た。

「……………」

言わない。

言えない。

言いたくない。

これ以上私を苦しめないで。

私は学校を出て、家へ向かっていた。

ドンッ!!

下を向いて歩いていたら人にぶつかってしまった。

「あ…すみませ」

私は顔を上げて謝ろうとした。

「…雛姫？」

ドクンッ

「……………っ！！！！」

その顔を見た瞬間、私は青ざめた。

この顔。この声。
間違えない。

ドクン、ドクン、

心臓の音が壊れるほどに鳴り響く。

私はそいつから逃れようと、走り出した。

「おい！？」

やだ

やだ

やだ

なんであんたが私の名前を呼ぶの？

やめてよ。

やめてよ。

パシッ

うでをつかまれた。

うでを。

私を傷つけたあの手で。

「いやあっ…誰かつ…誰かあーっ……………!!!!」

あの日の記憶が蘇る。

私は必死に抵抗した。

だがまったくコイツにはきかない。

やだ。やだ。やだ。

「黙れよ」

「……っ！！！」

私に向かって、はかれた言葉。

「うつせーんだよ。騒ぎやがって」

「じ…ごめ…んなさ、」

手足の震えが止まらなかった。

誰か助けて。

誰か

誰か

「…か…なた…あ…」

助けて

第6話・過去（前書き）

暴力的な表現あります

第6話・過去

あれは中学生の頃。

「雛姫、今日ちょっと付き合っしてほしいところがあるんだけどっ！」

私の男子の幼なじみからの要求だった。

その頃私には彼氏がいた。

中学2年の冬だった。

「別にいいけど…なんで？」

彼氏がいた。

だけど私はオツケーした。

彼氏は私にあんまり関心がないのか
この頃は私のことなんて構ってくれないし…。

「彼女が誕生日だからさ　どんなんがいいかなあて」

別に幼なじみと一緒に出かけたりしたって
関心を抱かない。

そう、思っていた。

「コレは？可愛いー！」

「えー?!」

ずっとこんな会話の繰り返しをしていた。

そんなとき

……

「…雛姫？」

「あ…隼人^{はやと}」

私の彼氏。
あおやま はやと
青山隼人

が私たちの前に現れた。

「…なにやってんの」

隼人はいかにも不機嫌そうな口調で言った。

なに怒ってんの？
意味わかんない。

「幼なじみと買い物」

私はさらっと答えた。

「…ふざけてんのか？テメエ」

は…？

隼人は低い声でそう言つと私の胸ぐらを掴んだ。

「…っ、ちょ…何?!」

痛い…!!

なにいきなりっ…!!

息が、できな…!!

「…お前さあ、彼氏いんのによくんなことできんなあ。ケンカ売ってんの?」

「…ち…がつ、」

助けて…!!

そう思つて幼なじみの方を見た。

助けてくれるって思つてた。

だけど

幼なじみは私の前から走り逃げた。

「……ちよ、！！」

ひびくよ。

ひびく。

「……っちこいよ」

隼人はパツと手を離すと、歩き出した。

ついて行きたくない。

「こなかったらどうなるかわかってるよな？」

こんな人だったっけ…？

隼人ってこんな人だったっけ？

確かにヤキモチ妬きだった。

だけど

ここまでされたのは初めてだった。

怖いよ……。

つれてこられたのは薄暗い、誰も通らないようなところだった。

「…は、隼人…？」

逃げたい。

「…ざっけんなよ…！」

いきなり私に向かって怒鳴りつけた。

私の体はビクッと跳ねた。

その瞬間、隼人は私の頭を思い切り叩いた。

「いった…あ…！！！」

痛いなんてもんじゃない。頭が割れてしまうのではないかというほどの痛み。

「何で他の男と一緒にいんだよ。あ？嫌だっつたよな？わかんねーのかよ?!」

また怒鳴りつけた。

そして次は私の髪の毛を掴んで壁に押し付けた。

「……ッ!」

背中に鈍い衝撃が走る。

「……言ってわかんないなら体で教えてやるよ。バカな女だな」

そう言うと隼人は私のお腹をグーで思い切り殴った。

「……、!!」

声にならない、痛み。

経験したことの無い、痛み。

しかも彼氏から。

そうだった。

隼人はヤキモチ妬きだから、他のヤツに近づくなつて……

あたし束縛……されてたんだ。

すっかり……忘れてた。

隼人は口で優しく言ってくれてたから……。

暴力なんて

されたことなかったのに……。

「…っ…っ…っ！」

隼人の勢いは止まらなかった。

次々に私を

蹴って

殴って

叩いて

「は……っ……！……！」

痛みがひどい。

意識がなくなりそう。

私が悪いの……？

「はや……とっ……！……！」

なんでこんなヤツのこと好きだったんだろ？

「……んだよ」

「違うよ……！……ねえ、違う……さっきのは幼なじ……！」

パシッ

「黙れ。言い訳すんな」

隼人は私の頬に思い切りびんたをした。

「っ…別れる…!!!!」

私はそう言っで、うまく動かない体で隼人から逃げようとした。

「逆ギレかよ…!!クソ女…っ!!」

隼人は私の頭を殴りつけた。

私は地面に倒れ込んだ。

すると隼人は上に乗ってきた。

待ってよ。

ねえ、待ってよ…!!!!

この状況じゃ私…襲われるよね………？

予想は

的中だった。

「……い……やあああ………！！！！」

信じない。

もう私は誰も信じれない。

信じたらまた

きつと同じことの繰り返し。

男なんてたいていみんな一緒の生き物。

きっと他の男子も…

コイツと 一緒

もう

誰も好きになれない。

汚れた私。

誰も

信じない。

男なんて

絶対 信じない。

みんながみんなそうじゃない、誰かがそう言ってた。

そうかもね。

でも私の気持ちにもなってみなよ。

体験してみなよ。あの恐怖を。

そんなこと

もう軽く言わないって思えるから。

男なんて みんな同じ。

あいつだって逃げた。

助けてくれるって
思ってたのに。

結局

自分が一番なんじゃん。

もう

信じない。絶対に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6500h/>

つれないお姫様

2010年10月15日13時29分発行